

婦人と子ども



小兒の虚言よつきて

黒田定治

小兒は概して虚言を咄くものなり。元來、虚言は、如何なる點まで之を許すべきか、如何なる點まで許すべからざるものなるか、子女教育に於ては、頗る考慮すべき問題なりとす。つらく思ふに、吾人、人間社會は、實に虚言の寄り合ひの如く、虚言を以てせざれば世を渡ること能はざるか如き觀あるは、正直の者を指して、彼れは馬鹿正直なりと稱するにても知らるべし。政治家の如き、公使の如き、商業

家の如き、代言人の如き何れも殆んど虚言にて固め居るものといふも敢て過言にあらざるなり。加之、かく述ぶる吾も、之を聞く人も、或は何れも虚言を咄き居るなるべし。

然りとはいへども、之を日本人と西洋人とに見るに、虚言につきての感情は、二者の間頗る厚薄あるか如し。我邦人にありては、他人に向つて、ウソツキヨといふも、平然たりといへども、西洋人に至りては、甚しく之を耻辱と感ずるなり。

今虚言の性質につきて考ふるに、其性質に由りて或は罪なきあり否らざるあり。例せば、或人は想像方に富み又は滑稽よりして、他人を喜はしむる爲めに虚言を咄くあり。此の如きは敢て損もなく罪もなきものなるべし。或は交際上に用ひらるゝ虚言あり、賜り物に輕少とか粗末とかの語を用ふるか如き、善しと思ひながらも、我子のことは他人には悪戯者で困るなどいふか如き、客來の時に際し、心に早く歸れかしと思ひつゝ、尙、歸らんとすれば態々引き留むるが如き、其他、書面の冒頭終末に、敬上とか頓首とかと記しなから、本文は一向、粗末の書き方をするが如き、之等は何れも儀式上の虚言にて、斯く言はざれば反つて他人に對し禮を失ひ、感情を害することゝなるべく、外國にても、同様用ゐらるゝ所にして、日常交際の上には必要なる虚言に屬すべし。故に虚言なればとて、悉く惡しとして責むべきにもあらず。只、道德上より見て責むべきものは、讒言を用ゐて人を陥るゝことなり、已を利し人を害せんか爲めに咄く處の虚言なり。

小兒を教育するに當りては、虚言も亦一の方便となる場合多し。食事の時飯粒を落せば目つぶるべしとか、大食すれば腹さくべしとか、人の眞似をすれば灸をすえるなど言ふが如き之なり。其他醫療上必要な方便となることあるは、死に瀕せる病者に向つて、其全快を豫告して氣を引き立つることの看病學上の一法たるに因りても知るべし。此種の虚言は用ゐて差支なきのみならず、又甚だ必要なことなり。

凡そ吾人の日常語る處のものは、多くは眞理に違へることとなり、かゝる境遇に取りて教育せらるゝなれば、人の虚言を咄くは極めて當然のこと、言はざるを得ず。又實際より見るも、小兒生れて已に三ヶ月に及べば、即ち虚言を使つて號泣するに至る。小兒は殊に自發的即ち自利的の感情に富むものにして、小兒の虚言は、此の感情より出づるもの多し。小兒に在りては、他愛的の高尙なる感情未だ發達せず、自分を愛し、自分の快樂を得、自分の苦痛を避けんがために虚言を咄くこと甚だ多し。例へば甘きものを食したる後、既に食したるかと思へば未たなりと云ふ、是れ尙多きを得んが爲なり。或小兒夏時冷水を飲むことを禁ぜられたるに、或時齧齒の痛みたる場合に、冷水をふくませて一時を凌がせたることありしが、之を記憶し居りて、次の時しきりに齒か痛むといふ、されは醫者の處へ行かんと云ふに之を肯んぜずして冷水を含さんと望み、含ますれば飲み下せり、又夜は八時迄は寝ねざるをになしたりしに、或時腹痛の爲め其前に寝ねたるを覺え居りて、寝ねんことを欲するときは腹痛がすると云ふが如し。滑

稽的の感情は小兒にも發達せるものにて、自分の罰をまぬかれんが爲滑稽に變ずるをあり、此の如きは
 大に小兒の心理學的、文學的志想を觀察する價値あるものとす。例へは親しき來客と話をなせるとき客
 に向て馬鹿と云ふ、其時叱かれは、客に云ひたるに非ず犬に云ひたるなりなど、言ひぬけるが如し。又
 小兒は權力の愛より虚言を言ふことあり、之は勝負事に多く彼の實際相撲に負けつゝも勝ちたりと云ふ
 が如し、之は已の負けたるをを發見さるゝを不名譽と思ふも又其虚言を發見さるゝを不名譽と思ふ念よ
 り何處までも虚言を通し漸く勝負の情しづまるに至つて遂に眞實の事を談するに至る、學校に於て告げ
 口をする生徒のあるときは虚言を導き易し、又巧みに言を飾るは、小兒の道德上危険なれば矯正すべき
 ものとす。小兒は又概して想像界に住めるものなれば想像の大なるが爲に虚言を言ふことは往々見る所
 なり、例へは横町にて馬位の犬を見た、博物館より大きい鯨の骨を見た等言ふが如き類なり。これは強
 ち深く咎むる程にはあらざるも、一步を誤れば危険に陥るべし。伊太利に自殺の多きは、國人一般に
 美術に富み想像に富めるを以て、已の想像を現實に行はんとして、果さいるより起るもの多しといふ、
 又想像の危険に陥らしむるものある此の如し、又或若き婦人好みて人殺しの小説を愛讀せしが、其想像
 にかられて遂には自ら人を殺して見たくなり、宿屋に於て其隣室の人を殺したるをあり、故に小兒が想
 像にかられて虚言を吐くとも、一步誤れば道德上甚だ危険なりとす。又小兒はよき目的の爲には虚言
 を方便に使用して可なりと思へることあり、例へは小學校に於て年少兒の小用して叱らるゝを救はんが

爲に其方便として水をこぼしたりと虚言を用ふることあり、されば其父母兄弟を救ふ爲には小兒は喜んで虚言を言ふならん。小兒は斯る場合には誠を守ることか高尚なると知り居るよりも、寧ろ他人を救ふを以て大切なりと思ひ居るなり、斯の如きは教育上重要な事として、教師の宜しく注意すべき所なり、即ちかく偏頗なる道徳上の感情を小兒に保たしむることに付きては深く注意すべき所にして眞實を守ると共に他人を救ふをも大切なりと云ふ公平の感情を持たしむべきなり、何となれば小兒は尙未だ善惡の差を辨別すること能はざるを以て小さき善なる目的を達せんが爲に大惡をなすやも知るべからざるを以てなり。されど又一概に善をなすと同時に虚言を云ふへからすとも云ひ難し、例へば國家の爲には如何なる惡もなざるを得ざるに至るとあり、或場合には善良なる目的の爲に虚言を使ふことあり、夫等は父母教師の最も注意すべき事となり、小兒は已の好める人と嫌へる人によりて、虚言の度に厚薄あり、已の愛する人には虚言少く、嫌へる人には虚言多し、故に小兒をして已を親愛せしむるは虚言を少くする一法なりとす。

女兒と男兒の比較につきては、統計的に調へたることなしといへども概して虚言は女兒に多きが如し。これ、一は女兒は一般に遠慮の念深く、男兒は淡泊無遠慮なるに因るなるべし。要するに、吾人の處世上、徹頭徹尾眞實を守りて虚言をいはざることは殆んど難し。且つ或種の虚言に至つては、單に罪惡たらざるのみならず、反つて社交上必要のものもあり、されば全く虚言を離れて眞

實^{じつ}の^みを^{まも}る^{こと}は^{これ}即^{すなは}ち^{せい}人^{じん}の^ま域^ぎに^{いた}る^{もの}に^{して}、^{いち}朝^{あさ}一^{いつ}夕^{ゆふ}の^{よく}す^る所^{ところ}に^あら^ず。故^{ゆへ}に^こ小^{せう}兒^じを^{けい}育^{いく}す^るに^{さい}際^{さい}して^は、^{よく}小^{せう}兒^じの^う虚^そ言^{ごん}を^{けん}究^{きう}して、^{その}種^{しゆ}類^{るい}に^より、^{ある}或^{ある}は^{これ}之^を許^{ゆる}し^{ある}或^{ある}は^{これ}之^を禁^{きん}す^る等^{とう}、^{一定}の^{ほう}針^{しん}を^{さだ}めて^{くん}練^{れん}せ^{ざる}べ^から^{ざる}なり。

